

農山村集落における茶生産の有機農業化・共同化の意味

—浜松市天竜区春野町の事例から—

静岡文化芸術大学 船戸修一

1 目的

本報告では、浜松市の中山間地域である、天竜区春野町（旧・周智郡春野町）にある A 集落を中心にして約 20 年前から展開されてきた茶生産の有機農業化や共同化のプロセスを辿ることによって、有機農業化や共同化が集落の存続に、どのような意味を持っていたのかを明らかにする。

現在、A 集落の人口は約 100 人、世帯総数は 39 世帯である。そのうち、20 世帯が、現在、有機農業でかつ共同で茶生産に取り組んでいる。この共同の茶生産には、他の 5 集落から計 14 世帯も参加している。さらに、この取り組みには、他地域から A 集落に移住した 6 世帯も参加している。

本報告では、集落ぐるみで取り組んだ茶生産の有機農業化や共同化が茶の付加価値や品質の向上に貢献しただけでなく、これらの取り組みが茶生産者の後継者を育成し、他地域からの移住者を呼び込む結果につながったことを明示することによって、過疎地域における住民の営為や力を検出したい。

2 方法

まず、A 集落において有機農業で共同化に取り組む農家への聞き取りを実施する。また、この取り組みに参加していない A 集落の農家への聞き取りも同時に行う。さらに、この取り組みに参加している、他の集落の農家や A 集落の移住者に対する聞き取りも行う。

3 結果

共同化によって農業機械の購入費や肥料代など生産経費の節約につながり、農業経営の個人的負担を軽減した。また、有機農業を導入することによって、栽培方法が統一され、品質も均質化した。有機農業によって栽培された茶は、安全な農産物として安定的な価格で取引されるようになった。さらに、有機農業に取り組みたいという移住者を集落に取り組み、茶生産を支える主力メンバーとなることによって、集落自体の存続性を強化していったことが分かった。

4 結論

有機農業についての先行研究である青木・松村編（1991）や桝潟（2008）では、有機農業が慣行農業と異なるため、それが農山村地域に導入されると人間関係に亀裂や断絶をもたらすということとは指摘されてきた。しかし、有機農業を基盤とした茶生産の共同化の取り組みは、農山村地域における新旧の人間同士の関係をつなぎ合わせ、結果的に集落の社会解体的危機に抗し、住民の営為や力によって集落を維持することにもつながっていったのである。

文献

青木辰司・松村和則編,1991,『有機農業運動の地域的展開：山形県高島町の実践から』家の光協会。
桝潟俊子,2008,『有機農業運動と〈提携〉のネットワーク』新曜社。